HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道医療大学サテライトキャンパス訪問調査
Citation	高等継続教育研究, 1, 117-136
Issue Date	2002-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51863
Type	other
File Information	Hokuidai-1.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

（5）北海道医療大学サテライトキャンパス訪問調査

2001年11月14日　12:30～14:00
北海道医療大学教育研究振興課長 上田 理子氏
訪問者　相川・姉崎・上田（敦）・佐藤・白取・孫・
谷・布上・平島・光本

サテライトキャンパス設立の経緯

上田　まず最初に、サテライトの事業についてということで質問をされていますが、ここの部分で、まず確認したかったのが“サテライト事業”という言い方なんですけども、「サテライトを開設している」ということを“サテライト事業”というふうに定義されてますか？

光本　ええ。まあ、あまり厳密に考えてませんが…。

上田　医療大学の場合はまず“サテライト事業”という考え方ではなくて、“サテライトキャンパス”という施設がある、それから“生涯学習事業”という生涯学習のこともやっている、と別のもので考えています。ですから、これからお話する内容が若干重なるところもあるんですけども、離れているところもあります。

それで、まず最初にサテライトキャンパスがなぜできたかっていうところからお話していきますと、まず、大学改革がいろいろ言われていますけれども、医療大学の中で、医療大学では、国が大学改革というふうに言われはじめた頃から、そのもうちょっと前からなんですけども、「21委員会」というものをつくって、大学がどうあるべきかっていうことをいろいろと考えてきました。

その後、「２００８（ニマルマルハチ）行動計画委員会」というのをつくりまして、1998年の段階でつくりまして、10年間の見通しを立てていきましょうということになりました。この中でいろいろつくったものの中に、もともと当別町に医療大学がありますので、どうやったら遠い大学でない、「札幌と大変近い大学」であるという印象づけができるか、という部分の議論が昔からあって、その部分を解決するために、サテライトっていうものをつくりたいっていう話が出てきます。

それで、そのときいろんな企画を立てているんですが、まず、ここのところは大学の理念を考え直すということ、財政基盤に関わること、大学の将来構想に関わる事項でのいろいろな考え。この中に総合研究所の設立だとか、大講座制へ変えていこうとか、それから医療機関の活性化――学部によっては附属の病院がありますので、それの活性化。そして、研究センターの創設だとか、学生の部室、実習関係、それから少人数講義室の増設であるとか、サテライトキャンパスの設置計画、マルチメディアの活用であるとか、ID カードの使用ということがここに出てきています。そして、それ以外に学長判断に基づき進められるものとして、基礎教育部の廃止であるとか、それからセメスター制の導入、FD、それから内部組織の改編などというようなことが出てきています。

これらを審議して、まず、サテライトキャンパスをやりたいという話になりました。

その前に、医療大学にある学部の説明をさせてください。

学部からの要望

上田　まず薬学部があります。それから歯学部があります。それから看護福祉学部がございます。看護福祉学部の中には、看護学科――看護婦になる勉強をするところ――と、医療福祉学科。医療福祉学科の中に2専攻ありまして、医療福祉専攻――こちらは、社会福祉士。PSW（*Psychiatric Social Worker*）、精神保健福祉士の勉強をします。それから臨床心理専攻――で、臨床心理専攻につきましては、臨床心理士になるための勉強であったり、カウンセラーの勉強をします。で、特に看護の関係につきましては、実習が必ず必要です。医療大学の附属病院だけでは、事例の数、それから、分野が足りないので、札幌市内の病院で実習をしています。それが3年から4年次のほぼ6カ月くらいかかって、各学生たちがグループごとに分かれて行っている状態です。その実

習というのもただ送り込んで終わりではなくて、行っている最中に必ず先生方が実習先に行って実習状況を確認し、何が課題であって、何を解決しないとその学生たちの臨床経験になっていかないのかっていう部分を検討しながら動きます。

ですから、特に看護の先生方は、当別から札幌まで動いてくる。そうすると、大学との連携がとれない部分、本人の研究が中断してしまう部分、それから学生たちもバラバラに行ってはいるんですけども、1 週間に 1 回必ずまとまって皆でカンファレンスを受けるというふうなカリキュラムになっていますので、そのためにまた当別に戻ってこなくちゃいけない、ということがありました。そこでまず、札幌市内で拠点が欲しいというのが、看護から出てきた声になります。

生涯学習事業とサテライト・キャンパス

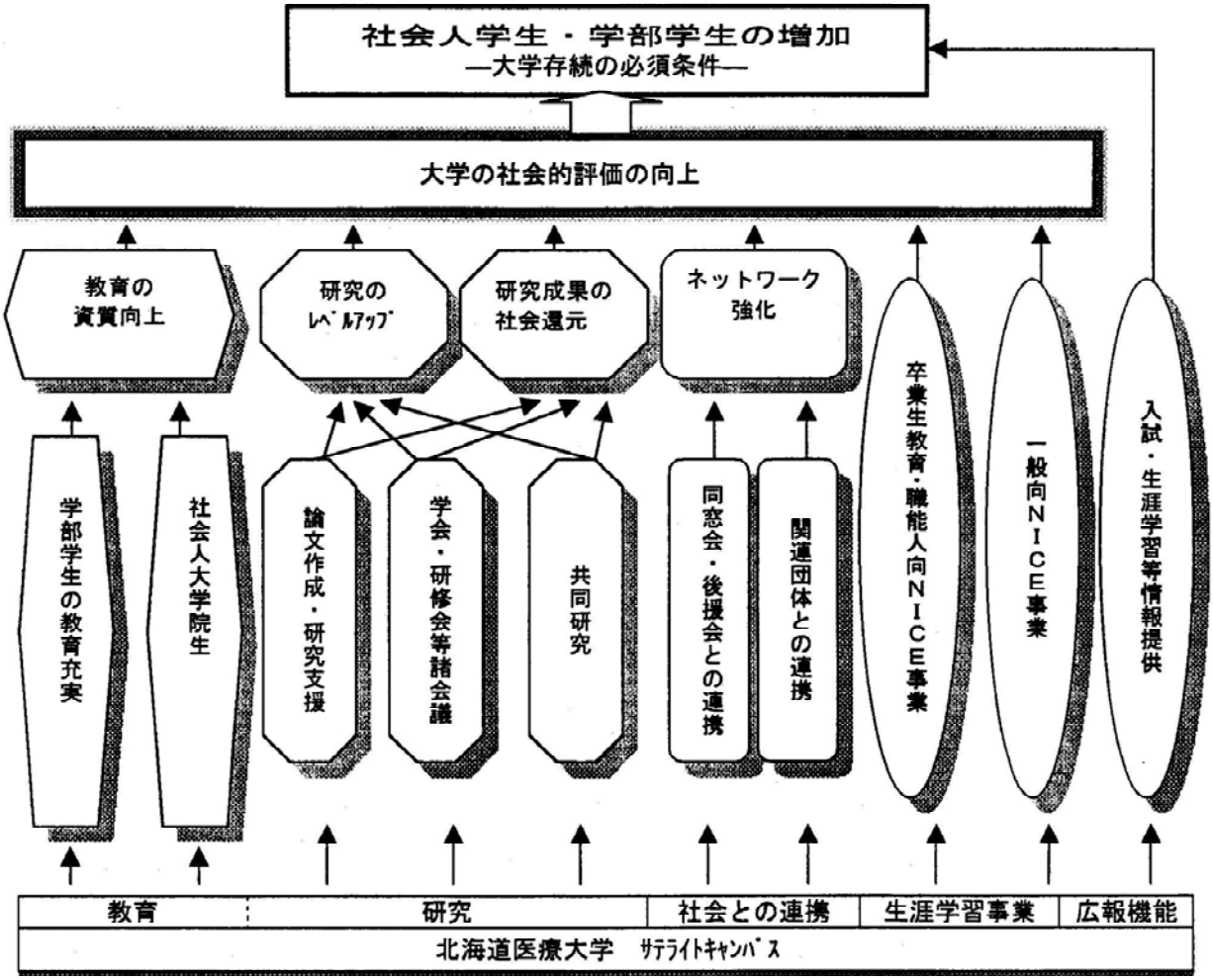
上田　それから、もう一つが生涯学習事業を平成 2 年から一般向けにやっているんですけれども――卒業生向けは昭和 61 年からやっています――で、こちらにつきましても、今までずっと貸し館でやっておりましたので、空いているところの場所を借りて、そして移っていた。それが、いつも同じ場所でできないだろうか、いつも同じような環境でできないだろうか――つまり機材がない場所もあります。そうしますと、こちらが持っていかなければならない。もしくは、こちらが持っていきたくても教育の方で使っていて使えないときもあります。そういうことを解決するために、どこか固定的な場所を使いたいというのがあって、生涯学習の方からも場所が欲しいという話がありました。もちろん、生涯学習の場合、当別町内、当別の本部でやるというのも一つだったんですけれども、当別は、まず皆さん「すごく遠い」と。札幌市内の方にとっては、“はるか彼方”というような印象があるようで、必ず「遠い」というお答えがアンケートの中に入っていました。それから大学の同系列の専門学校があいの里、北区にあるんですけれども、こちらで開催しても「札幌市内でやってほしい」というのがアンケートの答えに出てくるんですね。北区のあいの里なんですけれども、札幌駅から 30 分ほど JR に乗る。それはもうやっぱり札幌市内にあるというふうに見ていただけない。そういう状況にありましたので、それも考えると、やっぱり札幌市中心部に欲しいということがあります。

2008行動計画委員会の議論

上田　サテライトキャンパスをじゃあつくろう、という話になったとき、まず 2008 行動計画委員会――私ども「マルハチ」と言っていたのですが―― 08 の中で議論しました。

どういう方向で進むかということについては、講義ができること、カンファレンスができること。それを前提として、そして今までやったことのないことをやるので、できるだけ小規模から始めてやってみてはどうでしょうか、というところが 08 の報告事項にあったところです。それからしばらくの間、 1 年ほどの間は、これが話題になりませんでした。といいますのは、財政的なものとかを考えますと、そのときの試案でいくと、年額 1000 万かかるっていうことだったんですね。それだけの価値があるかどうか、医療大学として今すべきことは別にあるんじゃないかという議論がありました。その中で、やはり必要だという声がまた 1 年後くらいにあがってきまして、そして今度は、それをやるという前提でワーキングループをつくって検討してきました。そこの中で出てきたサテライトキャンパスの考え方がここの図になるんです（次頁図参照）。

まず、こちらにサテライトキャンパス。で、サテライトキャンパスの考え方として、教育と研究をまず支援する。それから社会との連携――せっかく札幌市内に打ち出すんですから、社会との連携を持たせる、と。それから生涯学習事業をやるということ。そして、せっかくやっぱり札幌市内にいるんですから、広報機能を持たせようという考え方になりました。



教育に関しては学部学生の教育を充実しよう——これが、実習関係のカンファレンスで学生たちの負担を減らすという部分になります。それから社会人大学院生——この段階で社会人大学院生はまだ少数ですが、入ってはきてはいましたけれども、仕事をやめて来ている方が大変多かったです。もしくは土曜日だけ講義を聴くという形。あと、あいの里の札幌医療福祉専門学校でやっている昼夜開講制の講義に出てくるという形で出てきていましたので、この学生たちにも何か支援ができるといいなということがありました。これをすることによって教育の質の向上が見込まれるのではないかと。

それから研究については、先ほど言った、先生方の実習の中の論文作成とか、あと、この起案の中で出てきたんですが、たとえば福祉の関係ですと、札幌市内にいるセルフヘルプのグループであったり、障害者のグループであったり、そういうことをやってらっしゃる施設の方々との研究会・連絡会などがある。それのためにもぜひ使えるような場所が欲しい。それがひいては研究のレベルアップにつながっていくという発想になります。

もちろん現場の方々、臨床の方々との共同研究があったり、ちょっと大きくなりますけれども、学会——大規模な学会ではなくて 100 人程度の学会でしたらこちらでできますので、そういうことを考えたものも含めてつくれないかという話が出てきました。そうすることによって、先ほど言いました研究のレベルアップ。それから、研究成果を逆に社会に還元していくことができるんじゃないかっていう発想が出てきたわけです。

それから社会との連携の部分では、同窓会・後援会との連携があります。同窓会につきましては、すべての学部が同窓会——ようやく昨年度立ち上げたところもあるんですけれども、薬学部と歯学部は当初からきちんとしたものを持っていました

――その人たちが研修のために使いたい、あるいは打ち合わせをしたい。札幌市内で働いている方、もしくは道外から札幌に来て一緒に合流する方がいますので、そういう方たちの打合せ場所としても使いたい。それから関連団体としまして、たとえば日本看護協会がやっている研修をお手伝いするだとか、あと、あとで話に出そうと思っているんですが、日本薬剤師研修センターというような専門職の団体、継続教育のための団体がありますが、そこと連携していくための何か方策がとれないだろうか、そうすることによって私ども自身の専門職とのネットワーク、卒業生とのネットワークが強化できるのではないかというふうに考えました。

それから生涯学習事業――これは後ほどもうちょっと詳しく説明しますが、それをやっていく必要があるだろうと。

そして広報においては、よく入試時期になると、間際になってから、「願書がないんですが、すぐ手に入りませんか？」というお電話を頂いていたんですが、それは「当別まで来てください」と言うと、その方にとっても大変負担になります。それでも苫小牧からいらしたり、京都から来たりっていうのも過去にはありましたけれども、それがすべて札幌にあれば、もう少しアクセスがいいのではないか。あと質問したいと思ったときに、ここに来て、何か聞いて、答えることができれば、学生さんにとってももうちょっと身近な大学になるのではないかということを考えています。

それを全部統合することによって、大学の社会的評価が上がっていくだろうと。ひいては、これからの大学の淘汰の時代の中で存続の必須条件としての、社会人学生だとか、学部学生だとか、一般の方たちの受講であるとか、大学が必要とされる状況になってくるのではないか、という考え方でなっています。で、このワーキングループの中ではどんなことができるかということを考えました。

姉崎　“NICE”って何ですか？

上田　生涯学習事業なんですが、生涯学習事業を省略して「ナイス」、“NICE 事業”というふうに、医療大学の中での固有名詞で使っております。

姉崎　なんか略称…。

上田　はい、これあとで説明させてください。で、これをやっていくにあたりまして、だいたいどれくらい年間コマ数使うだろうかっていうことを考えました。だいたい稼働率 40 %くらいで動けるんじゃないかというふうに考えておりました。そのときに考えていた段階で、今つくったものの基本になりますけれども、50 名程度の入る講義室が 2 部屋、ミーティングのできる 20 名程度の部屋が 1 部屋、先生方の拠点となる研究調査室が 1 部屋、それから事務などの部屋のスペースという考え方でした。

このときは経費だいたい年間 1000 万ということで考えておりましたが、必ず赤字になってしまうだろうということも含めて提言しております。ただ、広報費として考えた場合に、有形無形の形があるので、その部分は算定できないということも付け加えています。で、これがサテライトキャンパスができるところまでの話なんですが、このあと実際につくるための委員会を立ち上げまして、場所の選定、それから金額の選定等をしました。

場所の選定につきましては、ちょうどその頃 49 カ所くらいリストアップをしまして、そのうちの上位 10 カ所を見て歩いています。で、選んだ大きな理由としては、まず、札幌駅から北口は1丁ぐらい、南は大通まで。で、東西につきましては、西2丁から西6丁目の間という考え方でやっています。それは、雪のときでもまあ皆さん来やすいだろうという前提、それから札幌駅と地下鉄両方とものアクセスが悪くないところという考え方です。そして、実はここのビルよりももっと安いところもあったんですけれども、他に入っているテナントさんの印象も考えながら選んでいます。

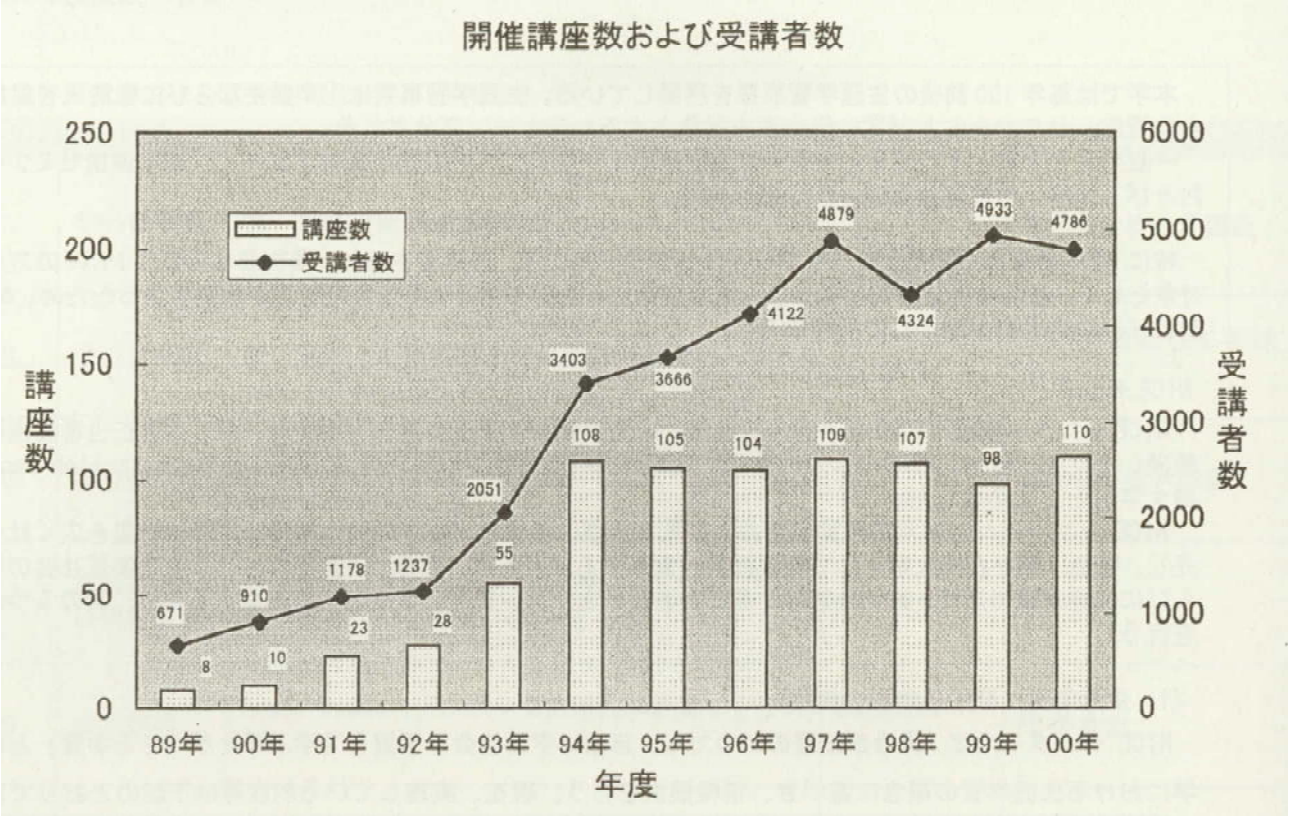
他大学の事例

上田　次に、そのときに参考にしたところっていうのが――ちょっと質問事項に入っていたんですけれども、札幌国際大学さんが 98 年につくったというのはその時点では把握していませんでした。エクステンションセンターがあるというのは知っていたんですが、札幌中心部というふうに理解していませんでしたので――小樽商科大学さんを見に行っています。それから札幌学院大学さんを見に行っています。で、それ以外にですね、後ほどお渡し

する資料の中にも入っていますが、全国のエクステンションセンター、サテライトを持っている大学に対してアンケートを取りまして、ダンボール箱 2 つほどの資料になっておりますけども、それを 1 冊にまとめて、さらなる検討資料として使っています。で、これがサテライトキャンパスができた経緯なんですけれども、ここまでのところで何かご質問ありますか？よろしいでしょうか。

NICE事業

上田　次に、生涯学習のお話になります。先ほど先生から質問があったように、私どもでは“ NICE 事業”という言い方をしております。“ NICE ”というのはもともとですね、*Northern Institute of Continuing Education* ということで、“北方にある継続教育”という形で始めました。それが平成 2 年の段階です。で、今回これをやるにあたって、サテライトをやる直前なんですけれども、 NICE という事業をそのまま継承するか、もしくはなくして新しいものをつくるかという話が出ていたんですが、ちょうど国際交流と生涯学習を一緒に考えようという発想に大学全体がなってきたものですから、“ NICE ”という定着した言葉はそのままにしておいて、その意味合いを変えましょうというふうになりました。で、今は *National and International Collaborative Extension* ということで“ NICE ”になっております。で、当初はサテライトキャンパスも“ NICE センター”という形の位置づけをしようということになったんですけれども、フタを開けるというか、生涯学習だけの使い道ではないというお話が随分出てきたので、“北海道医療大学サテライトキャンパス”という命名になりました。ただやっぱり使用頻度というのは、生涯学習が一番多いかと思われます。



生涯学習なんですが、一番最初に始まったのが 1986 年に、これは卒業生対象のもので始まっています。で、薬学部、歯学部の卒業生対象のセミナーがあって、そして 1989 年、文部省の方でも生涯学習を言い出した頃に、一般を対象としたものを始めています（グラフ参照）。まずここで 1 回グラフが上がっていますけども、これは地方の会場を使い始めた頃に。最初は札幌市内だけでし

たが、そのあと、支部でもやってほしいという話があって、道内何カ所かですけれども支部で開講をしています。それから 1989 年、この段階で一般向けを少し始めました。それから徐々に徐々に回数を増やし、場所を増やしという状況で人が増えています。で、 1 回ここで減っていますけれども、この部分につきましては、いろいろと飽きられてきたのかなっていう反省事項もこちらもありました。で、また内容変えて次の年、ちょっと盛り上げたというところあるんですが、それからまた集客がなかなか難しい状況です。 2001 年度、現段階で、 4300 人の方がもうすでに来てらっしゃいますけども、講座数が棒グラフになっています。こちら見ていただければ分かるように、講座数を増やして人が来ているという状況なので、一つの講座に関していらっしゃっている数は随分減っているというのが現状です。

生涯学習の考え方なんですが、まず卒業生対象のものがあります。で、学部が先ほど申し上げましたように薬学部、それから歯学部、看護、福祉、心理、それから専門学校もありますので、専門学校の衛生士専門学校、看護の専門学校、介護福祉士の専門学校と言語聴覚士の専門学校という形で企画を立てています。で、今年からはそれだけではなくて、ということで人事・労務部門の担当者向けのリフレッシュスクールをつくっております。人事・労務部門というのをちょっと説明いたしますと、医療大学に心理の部分と、それから看護の部分――まあ医療関係の教員がいますが、この中で特に心療内科を担当している教員のところに外部からの講師依頼が大変多くあります。理由としてストレスの問題、それから産業看護というんでしょうか、勤労している方々の精神衛生の部分、それを人事・労務の部分で担当しているんですけれども、それについての情報提供が少ないということがあったので、その声を受けてつくったものです。

こちらは一般向けになります。国際健康フォーラムという考え方で、海外の方をお招きして、健康問題をやろうという。それから学園都市線セミナー。これはそもそもがですね、医療大のある石狩当別が学園都市線という沿線上にあります。で、当初札幌にまだそれほど出ていっていない頃は、その沿線上のあいの里、それからもっと先の方でいきますと月形、浦臼といったところで公開講座をしていました。そのときに付けたネーミングなんですが、まあ札幌市内も学園都市線の延長にあるということで、そのままにしました。

それから今年度から始まっているのが、エルダースクールになります。エルダースクールというのは、受講者の人がたいてい高齢者であるというのがあるんですけれども、健康な高齢者を対象にしよう、と。高齢者高齢者と言ったときに寝たきりの高齢者とか、動けない高齢者がどうしても話題になるんですけれども、実際蓋を開けると 8 割近くの方々が健康な高齢者という状況です。ですから、この方たちの次の人生を歩んでいただくために、どんなことが私たちから提供できるかっていうことを考えています。

それからその他の事項で、今年は特になんですけれども、サテライトキャンパスを開講したこともありまして、高校生向けの特別講義と、それからサテライト完成の特別記念の講演をしております。

受講料の考え方

姉崎　右についている数字は何ですか。

上田　こちらはですね、参加料に関する質問もあったので受講料を記載しておきました。で、基本的には卒業生向けのものは1コマあたり 3000 円。で、シリーズものについてのみお金をいただいております。で、一般向けにつきましては、1コマあたり 500 円。ただし、形によっては 8 回のシリーズに来ていただくことが難しいこともありますので、単発でいらっしゃる方は 700 円。シリーズの方は 500 円×そのシリーズの回数っていう考え方です。ですから、たとえばエルダースクールの一番最初のものが 8 回ありましたので、 4000 円です。1回 500 円ですから。で、単発でいらっしゃった方からは 700 円を頂くという形で行っています。

今お金の質問が出たので、学園都市線セミナー、エルダースクールについては、基本的にはシリーズものは有料化にしようという発想で昨年度から動いています。一つには有料化することによって、受講者の方の受講動機になるという考え方。

それからもう一つには、企画をする先生方に「お金を頂くんだからそれだけの内容を提供してください」というこちらからのプレッシャーがかかる。そしてもう一つは、大学が広報として今まで提供していたけれどもそれでいいんだろうか、受益者負担という考え方を持っていてもいいのではないかという分と、大学の財政がなかなか厳しくなってくる中で、少しでも補填できるものがあればそれはいいのではないかという、いろんな面からの発想からです。

有料化にしていないものが下の方にあるんですが、まず一つがこちらの地域連携セミナー。地域連携セミナーというのは、基本的に行政であるとか、地方自治体であるとか、それから病院であるとかと連携をしていくという考え方です。連携をしているということは、うちだけの主催ではないということなので、他との兼ね合いもあって有料化にしていない。地方公共団体がやっているものについては無料が原則であるということも多いので、それも考えています。で、ここに現段階であるのは、札幌厚生病院さん、それから江別市さん、それから当別町さんなんですが、これ以外にも千歳市さんであるとか、砂川市さんという形のものもあります。うちが主体的に関わっているものは、地域連携セミナーとして位置づけ、そうでなくて向こうが主体的に関わって、うちが講師派遣であるとかっていう形になっているのは共催という扱いにしています。

学校開放講座

上田　最後に学校開放講座なんですが、文字どおり学校を開放している講座になりますので、サテライトキャンパスでやることはちょっと難しいものになります。薬学部に附属の薬草園がございますので、それを見る会、それをこっちに持ってくることができないので、来ていただく。それからスポーツ医学セミナー、それから学術文化セミナーにつきましては、学生の体育局、あるいは文化局の学生に聞いてもらいたいという発想で始めたものなので、それを「どうぞ公開しますから聞いてください」という形にしております。それからここに書いてあります総合科目ⅠとⅡにつきましては、もともとは看護福祉学部の 1 年生の選択必修の講義になっております。これを一般に開放して、無料で――聴講生という形ではなくて――公開講義という形で提供しています。

今年につきましては――今までだいたい先ほども表にありましたけれども、100 程度までだったんですが――今年につきましては破格に多く 203 講座、企画してございます。受講者数は今、さっき申しましたようにだいたい 4000 人程度で推移していますけれども、今年についてはもう少し期待はしていますが、人数から考えて 5000 人いくかな、っていう状況かと思います。

受講者の特徴

上田　それから、質問事項にありました受講者の特徴の部分ですが、卒業生向けにつきましては、やっぱり「今、困っている」という方が大変多いので、若い方が多いです。で、ただ一般向けのものになりますと、圧倒的に高齢者、 50 代後半からの方が多く、男性ですと引退された方というのが多いです。ただですね、今年度につきましては、サテライトが 9 月以降できたこともありまして、夜の時間帯に心理関係のものを一つ企画しています。それは若干年齢層が若くなっています。勤め帰りの方で心の問題に関心のある方が来ているという状況だと思います。

受講料は、先ほど申しましたとおり、基本的には頂く方針ではいきたいが、いろんな諸条件により頂けないものも多くあります。シリーズものは頂くようにしていきたいと考えていますけれども、来年度はやはり広報の部分を考えると、無料のものをもう少し増やした方がよいのではないかというふうに上の方からも指示が出ています。

組織・体制

上田　それから組織、それから職員の体制なんですけれども、これにつきましては先ほど言った NICE センターの、NICE センターを統括している NICE 委員会というのがあります。教員が 15 名、事務職員が 2 名――私と私のところの部長と入っている

という状況です。で、そこが基本的には生涯学習に関する企画と運営に携わっております。そして、先ほどのサテライトの話とちょっと前後してしまいますけれども、サテライトにいる職員につきましては常駐者 1 名。ただ、彼女は正職員ではなくて、契約の職員です。もうひと方、週 1 回来てくださっている方はアルバイトで、 50 代の女性の方にお願いをしています。

生涯学習事業の理念

上田　以上の中で、医療大学の生涯学習らしさという部分につきましては、まずキーワードとして、教育理念の中にありますが、“保健・医療・福祉の連携・統合”、これをキーワードにしています。常にその部分については、視点を持っていたいと思っています。それから企画をするときに必ず視野に入れているのが、うちの大学らしい企画であるかどうか。サテライトキャンパスをオープンするときにも議論にはなったんですが、会場を埋める――使用率を上げるためには、たとえば英語の講座。それから、札幌学院さんがやってらっしゃいますけど、パソコンの講座。これをすると埋まることは分かっているんですが、それがうちの大学らしさとつながるんだろうか、他のカルチャーセンターとどう違うんだろうか、っていう議論は随分しました。その結果、サテライトキャンパスではパソコンの講座はしない。ただ、英語については今、教員の中から、たとえば看護職の英語であるとか、高齢者が新しく英語学校に通うのは難しいけれど、エルダースクールの範疇での英語学校っていうか英語の教室だったらどうだろう、というような案が出ていますので、この部分については医療大学らしさというのを模索しながら企画していくことになると思います。

現状と見えてきたもの

上田　今、生涯学習事業がいろいろあった中で、サテライトキャンパスで行われているものなんですが、9 月以降の開講になっています。卒業生向けについてはシリーズにして 3 シリーズ、10 講座を企画しています。それから一般向けについては、 50 講座。それから、特別なものとして、起ち上げたときの特別企画にあったものが 15 コマあります。という形ですので、9 月から 3 月までの間ですけれども、合計 75 講座、生涯学習についてはここでやる予定です。 203 のうちの 75 というふうに考えていただければと思います。あと、ここの中で話題に出てきている、研究・教育とサテライト事業との関連、それから大学の事業の部分についてなんですが、大学の教育と研究…先ほども言いましたように薬学部、歯学部、看護福祉学部の中の福祉と心理というふうにありますので、それと必ず結び付けていきたいと思っています。

それで、9 月からオープンした中で、こちらが意外だったことというのは、研修会などで使われることが多いのではないかという予測を私どもしてました。ところが一番多い形が、先ほどの会議室を使って、小規模の研修会であるとか、施設との打ち合わせであるとか、それからたとえば児童虐待の研究家グループたちの打ち合わせであるとか…そういう形の大勢の人数ではなくて、今までだったら喫茶店やファミリーレストランを使っていたものというのが、ここを使ってやれると、大変好評を得ております。そういう意味では、そういうことによって――基本的にはここを貸し出すにあたっては、本学の教職員、同窓会員、それから後援会員でないと借りられないということになってますので――今の現段階では教職員が大変多く借りているというところなんですが、教員の研究に多分お手伝いが出来ているのではないかと思います。それから教育につきましては、先ほど大学院のガイダンスというか、指導の部分の話をしましたけれども、大学院の指導でも使っています。

ちょっと意外な形の使われ方だったのが、ある福祉の先生が NPO 団体に関わっている。で、その NPO 団体にうちの学生に関わらせて、臨床的な福祉の現場をやらせるってことをやっているんですが、その NPO 団体が使うっていう形で、その先生が入り、学生が入り、 NPO 団体の打ち合わせをここでするという使われ方もしております。

大学の事業の全体の中でっていうことでは、生涯学習の使い方が一番多いんですけれども、そ

れ以外に非常勤講師の方の特別講義をこちらで行う、というような形が出ています。

課題と将来構想

上田　課題とか将来構想につきましては、まず課題についてですが、 9 月にオープンしたばかりなので、課題はまだ山積みです。どういうふうに貸し出していくのが一番いいのかっていうのがありますし、貸し出しの方法も今のやり方が適当かどうかっていうのは、事例を集めてからでないとできない状況ですし。あと、PR の方法についても、今は本部の方に電話をかけて空き状況を確認するようにというふうにしているんですが、ホームページをアップしてかなければならないということで今動いているところです。

それからあと、こちらを無料のままずっと貸し出していいのだろうかっていう議論は当初からあります。最初の初年度については、もう PR の期間であるということで、上の上層部の方にも OK をいただいて、無料で貸し出しをしています。ただ、来年度以降につきましては、有料化をするということを考えていますので、その方向をどういうふうにするのが適当なのか。札幌市内でいえば、“かでる 2・7 ”とか、無料ではないですけども、大変リーズナブルなところで提供しているところがあるので、それとどのようにバッティングしないで、なおかつそれなりの効果のある貸し出し方をできるかどうか。あと、日曜日については今、職員が配置されていません。でも、借りたいという方には貸すということになっておりますので、そのときの部分の料金設定も、特に力を入れて考えなくちゃいけないところかな、というふうに考えています。

あと将来構想としては、生涯学習を基本的には全部ここでできるようになればいいなというふうに思っています。ただ、Max が 100 名ぐらいの机付きの椅子なので、それ以上の大きいものになると、やはり大きな会場が必要になります。

それから、先ほど社会人の大学院生の話題が出ていたんですけれども、社会人の大学院生のための講義を、ここで企画をする。で、確か札幌国際大学さんがやっていると思ったんですが、サテライトで開講される講義があって、それに科目等履修生などが来る。もしくは、そこで一つのコースができるということが、将来的にできればと思っております。で、これの特にモデルケースとなっているのが、東京の薬科大学で、明治薬科さんだったと思うんですが、科目等履修だけの社会人向けのプログラムを年間 20 ほど掲げてらっしゃいます。そういうような形のものが将来的にできれば、というふうに考えております。

あと、連携の部分で言いますと、どのように他のところと連携していくか。これが、交渉事でもあり、あと相手のあることでもありますので、なかなか難しいところなんですけれども、今、一つ提案が出てきているのが、日本薬剤師研修センターという薬剤師の継続教育を統括している財団があります。こちらが札幌では今まで講義を開講していなかったもの、それをここでできないかという提案が来ています。そういう形で、貸し館のような形での提供ができていけばと思っております。

医療大学の研究・教育、経営の課題

上田　医療大学の研究・教育、経営の課題についてに入りますが、経営につきましては、現段階では、厳しくはなっておりますけれども、苦しい状況まではなっていないですね。一つには学生募集の問題があるかと思うんですが、今よく言われているのが、資格志向の学生が増えているということです。

医療大学の場合ですと、志願者の合計が 2001 年度の場合で申し上げますと、薬学部の場合、前年対比が 106.5 %。歯学部が若干減って 91.1 %。看護福祉学部の看護につきましては 111.9 %。福祉については、これはちょっと大幅ダウンなんですが 77.2 %。心理につきましては 94.9 %という状況で、 2 割ずつ減っていっていると言われている一般の平均よりは比較的いい状況である、と。自然減の状況ではないかというとらえ方をしております。

福祉につきましては、北星さんであるとか、浅井学園さんなどであるとか、いろいろなところで福祉の部分が増えてきたということと、もともとのパイが少ないのと、介護福祉士と社会福祉士の違いがま

だ周知徹底されていないということが大きな理由として考えられております。今ので関連して申し上げますと、倍率もですね、だいたい薬学部で 8 倍、歯学部で 3 倍、看護福祉学部で 3 倍。福祉が 1.6 倍でちょっと低めですけど、心理も 3 倍くらい人が来ておりますので、まだ学生募集の課題というほど大きくはなっていません。ただ、大学としてこれからどういうふうになっていくか、先行きがやはり不透明な状況、そして医療大学として存続させるためにはどういうふうにすることが必要かというのは、特に経営陣ですけれども、大変危機感を持っています。そして、08 行動計画委員会であったり、さまざまなものを起ち上げているというところになっています。

あと強いて課題といえば、社会人の取り込みをどうするか。それから大学院をどれだけ活性化していくかということが課題になっていくと思います。医療系の大学なので、臨床が中心ではありますし、たとえば看護福祉学研究科も臨床の専門家を養成するという専門看護師の資格が取れることに認定されておりますけれども、同時にやはり研究機関であるという部分を医療大学としては手放したくない。ですから、博士課程もすべての学部で持っておりますし、それは今後継続して拡大していきたいという発想を持っております。

あと、課題になるのかどうか分かりませんけれども、心理が大変今注目を浴びているという部分、それから言語聴覚という部分が国家資格になったことと、それから札幌医療福祉専門学校。専門学校なので、これが将来的にはそのままでいいんだろうか、という議論が 08 行動計画の委員会の中に出ておりまして、その部分を解決するため、新たな展開をする予定になっております。それが 2002 年 4 月から心理科学部というものを起ち上げまして、臨床心理学科、それから言語聴覚療法学科というものを起ち上げます。で、札幌医療福祉専門学校は来年度から学生募集を停止しまして、看護につきましては看護福祉学部に合併・吸収。それから介護福祉学科については臨床福祉学科の中の 1 コースとして存続。そして言語聴覚については学科昇格という形に、変更を加えていく予定です。ですから、それに伴って看護福祉学部の臨床心理専攻、こちらも発展的に解消することになっています。

あと、医療大学の研究・教育の特徴としましては、やはり北海道にあるということで、北海道の地域性を視野に入れた医療ということを考えております。たとえば薬学部ですと、今年度からですが、地域特別選抜という推薦入試の形もとっています。指定された地域からの枠をつくっていて、そこから推薦された方に受験していただくという形です。それから歯学部につきましては、これは臨床の部分にもなるんですけれども、在宅介護を受けている高齢者の方に、どういうふうに歯科医療を受けていただけるかということを考えて、在宅訪問歯科診療というのを始めています。それから、噛むことと痴呆に関係があるということもあるので、今研究分野でもそういうことが進められていて、看護の分野と歯学の分野の連携・協同が行われております。それから看護につきましては、看護自体の資質向上というのが言われていること、それから地域の部分。これは看護大学全般に関していえるんですが、保健婦の資格を取れることになっています。保健婦というのは地域に根ざした看護ということなので、その視点がどうしても欠かせません。福祉はどうしても地域がなければ成り立たないものなので、特に福祉につきましては、教員が現場に出てっているという印象を個人的に持っております。今度の見通しとしましては、先生方の研究分野の基礎的な研究の発展もそうなんですが、やはり地域とどういうふうに密着していくかっていうことが大きくなると思います。

一応概略的なお話がこれで済んだかなと思っているんですが、何かご質問等ございましたら受けていきたいと思います。

立地について

光本　どうもありがとうございました。かなり全般的な質問だったので、ちょっと大変だったかなと思ったんですが、ありがとうございました。最初に教員の方からいくつか質問させてもらいまして、そのあと参加者の学生に質問してもらいます。

姉崎　NICE 事業で、場所を選んでここ（毎日札幌会

館)にしたけど、毎日新聞ってカルチャー事業ってやってないんですか。

上田　毎日新聞はやっていないようです。

姉崎　ああ、それでバッティングしなかった。

上田　それは考えませんでした(笑)。読売さん、道新さんはやってますし、朝日さんも朝日カルチャーセンターがあります。毎日さんは、幸か不幸かなかったですね。

講座数が増えた理由

光本　先ほど見せていただいたグラフで、ここ数年間は 100 講座程度だったんですが、今年 203 と、グンと倍近くの利用ですよね。どういった理由で突然あれだけになったんでしょうか。

上田　はい。通常の企画をまず最初は立てていたんですが、サテライトキャンパスについての検討に関して、まず上の方から指示が出てきたのが去年の 12 月頃の話なんです。その段階で企画は立てていて、予算を立てる段階でサテライトがある場合とない場合と両方立てているんですが、ない場合を想定した場合は 100 程度で終わっていました。その段階ではサテライトが実際に GO サインが出るかどうか分からなかったんです。で、実際に GO サインが出たのが 6 月。そこでさらに大まかな外枠を立てていたものを、実際に 9 月までの段階でサテライトを使ったものという形で増やしたということでいきました。ですから、年度当初からここがガラスキでは困るということがありまして、わざわざ、というところが大変大きな理由になっております。

ですから来年度は多分また 100 台に戻ると思います。戻したいと思っております。

他大学との差異化、学部間の温度差

姉崎　2008 年計画ということだと、まだ何年かありますよね？

上田　はい、あります。

姉崎　そうすると、中間的な見直しとか、5 年経ったら見直しとか、そういう中間総括をして、まだ別な新しいことをやるとか、そういうのはあるんですか。

上田　はい。一応当初の予定では、3 年後、このサテライトについて見直す、っていうふうになっています。大きな理由としては、それが適切な投資であるのかどうかという確認と、それから、さらに広いものが必要になることもあるのではないかと希望的な観測を持っています。

この企画を立てている段階で、「どうせだったらビル一個買おうよ」という話も当初出ていたんですね。その部分を抑えるということもありまして、「一部屋でまず始めましょう」と。「だけど見直します」という方便的な部分もあって、見直しをかけるということは一応決まっております。

姉崎　それから、ユニバーシティ・アイデンティティ(UI)じゃないけど、同種の大学だとか、学部は違っていても、“医療大らしさ”っていうやつですよね。そういうものは、今お聞きしていると、結構、多面的なことをやってらっしゃるので、何か重点というか、そういうのは、かなり相当広いことをやっておられるので、その中でも特に、というものは。

上田　特に、と言うと？

姉崎　たとえば NICE 事業と、同窓会やその共同研究とかっていうものとは、必ずしも一緒でなかったり、あるいはアフターケアというか、資格対応の部分も必ずしも成り立たなくなったり、その辺の構造みたいなのは。

上田　そうですね。卒業生向けのっていうことは、大学自体のこれは問題になると思うんですけれど、専門職は常に勉強していかなくちゃいけないということで、当初からも今も、卒業生向けに何ができるか、っていうことはいつも課題になっております。

そのためには最新技術、最新の情報を提供していかなければならないという問題があって、それをやらねばならないんですが、つまり、研究現場にいると臨床現場のことが分かりにくい。なので、これから多分医療大学が提供できていくものというのは、どうやって地域と連携していけるか、その中で大学・研究と臨床と結びつけたものをどうやって提供できていくかっていうのが、これからのずっと課題であり、重点的に見ていかなければならないことになると思います。

どちらかというと、医療大学として何を重点的にっていうのは、大学をともかく知ってもらうっていう

のがまず最初のスタート地点でしたので、それがあると。

姉崎　学部間では多少温度差みたいなのありますか、サテライトについて。

上田　学部間の温度差はあります。やはり看護福祉学部が一番活用しています。

ただ、特に歯学部ですと実習機材がないとどうしようもないっていうのがありますので、歯学部のリフレッシュスクールも卒業生向けにやっていますが、サテライトではできませんということで、実習機材があるところでっていうのと、大学でやるという形をしています。それから薬学部については「座学はいいけれどね」っていうのがやはり出ています。なので、学部間の温度差、サテライトを利用する温度差というのはあります。

あと、9 月からここまできて見てると、こちらにいらっしゃった方といらっしゃったことのない方の間の温度差が大変大きいです。来たことのない人は「どうせ札幌市内だよね」っていう言い方で、使うことを発想に入れていないんですが、1 回でも来たことのある方は「あ、使おう」という発想になっています。多分新しいことと場所と、いろいろな機材を揃えられている、その機材が使い勝手がいいっていうことがあると思います。

姉崎　どれくらいの方が使っているんですか、スタッフで。

上田　どれぐらいというとちょっと難しいんですけれども、パッと見ていただいて、これが 9 月から 1 月までの予定なんです。で、予定で埋まっている状況としては、だいたい週に 2 、3 回は誰かが何らかの形で使っている。これが昨日までの段階なので、これ以外にも入ってくる飛び込みのものがあるという状況です。人数的なものはちょっと把握していませんが、延べ人数ではだいたい、週に 3 回ぐらいかなとは思っています。利用者の数、単独の数――同じ方が複数回数使っている、っていうことを考えると、40 ～ 50 人ぐらいかしらね…。代表者の数でいくと。

姉崎　それはどのくらいの比率ですか。3 分の 1 …、半分ぐらい？

上田　確か 200 何名いると思いましたので、300 人として 6 分の 1 くらい。ただ、1 人が代表者として申し込んでいて、それに伴って複数来ている場合もありますので、まあ 100 名前後の方は来ているんじゃないかなっていう気はしますね。

姉崎　学内広報も必要。

上田　そうですね。ただ、学内広報としてはロコミの方が強いと思っています。大勢来られてしまっても、ちょっと今まだ、これでもてんやわんやというところがありますので。あと、卒業生がセミナーを受けてみて「あ、使える」と思って、同窓生が申し込んできているというものも結構増えてきていますので、どこまでどうなるのかなっていうのがちょっと。

光本　稼働率はだいたい何%ぐらいですか？

上田　週 3 回でもダブルヘッダーとかあるもんで。そうですね、今、半分まではいかないですけども、当初の予定の 40 %は使っているのかなっていう気はします。

光本　じゃあだいだい計画の見通し通り。

上田　はい。ただ、思っていた以上に、生涯学習ではない部分での使われ方の方が多いですね。

薬学部の地域特別選抜

光本　薬学部の地域特別選抜というお話、興味深くうかいました。その中身、それから、関連して、学生の出身地域や卒後の就職先などについて少しお聞かせ願えますか。

上田　全般的な話で申し上げますと、学生の道外道内比率がおおよそ半分半分です。都道府県別の状況で言いますと、圧倒的に多いのは北海道です。合格者数でいくと、全学部の合計で北海道が 281 です。それから、それ以外に 2 ケタ来ているところは青森県、宮城県、それから福島県、群馬県、千葉県、東京、それから大阪になります。都道府県についてはまったく来ていない都道府県がほぼ 10 弱です。ですから、全国各地から、1 ケタではありますけど、来てくれている状況です。

光本　就職の状況になると。

上田　就職は出身地に戻っていくことが多いですが、北海道内の就職もいないわけではありません。

光本　道内から来ている学生さんは、だいたい道内に戻られるわけですか。

上田　そうですね。あと、道外から来ていても北海道

に就職する学生もいます。ただ、基本的には戻る学生の方が多くて、就職課としては、 3 年次に言ってくれれば、道外の地区も就職活動の範囲として、職員側の支援をしていくということができるという体制にはなっています。

光本　それで、薬学の方の特別選抜というのは具体的にはどんな形になっているのでしょうか。

上田　条件としましては、北海道の次の支庁に所属する全日制普通科または理数科の高校、ということで、支庁名を言っていきます。檜山、空知、留萌、宗谷、網走、胆振、日高、十勝、釧路、根室の 10 支庁を選んでいます。これはなぜ選ばれたかといいますと、全国 10 万人あたりの薬剤師の数が全国平均以下の支庁です。

ただ条件がちょっと厳しくて、指定する地域の高校の卒業見込み者で――つまり現役で、薬学部を志願している。で、地域貢献しようという強い意志がある方。そして、化学のⅠ B を習得していること。それから評定平均が化学については 4.0 以上で、評定平均が 3.8 以上。

姉崎　特別選抜は推薦だけで。

上田　小論文を書かせています。定員は 150 名中の 10 名です。

光本　これは今年から。

上田　はい。今年からです。

光本　狙いとしては、やっぱり薬剤師過疎地域に少しでも貢献したいということだと思うんですけど、そうすると、やっぱり地元地域に戻ってもらわないと狙いが果たせないことになると思うんですが。

上田　実際にですね、出願者の中に、出身地域はここなんだけれども、高校だけ札幌に来てるっていう学生さんがいて、出願資格がないということで却下されてしまった例があります。

光本　地元に帰る意思があってもだめ。

上田　意思があるのが確認できない、ということだと思います。なので、すごく厳密にしています。きちんと戻る意思があるという確認をとっている。

姉崎　それは、戻るっていうことを前提に来るわけだろうけど、何かこう利点ってのあるんですか、その学生に。授業料が安くなるとか。

上田　いや、そういうのはないです

学費と就職

姉崎　学費はどれくらいなんですか。それぞれ学部ごとに違う。

上田　はい、学部ごとに違いまして、薬学部でいきますと、初年度の学納金、入学手続時の入学金も含めましてですね、 246 万 5 千円。入学金はだいたい 60 万です。ですが、やはり理系なので、薬学部がまず 246 万 5 千円ですね。2 年次以降は 186 万 5 千円。それから、歯学部は

私大の歯学部の中では安い方で、初年度が 966 万 5 千。2 年度以降が 406 万 5 千です。看護学科が、初年度が 201 万 5 千円。2 年度以降が 141 万 5 千円です。それから、福祉に関しましては、初年度が 171 万 5 千。2 年度以降が 111 万 5 千円です。

布上　就職の状況はどうなんですか。

上田　薬学部の場合、2000 年度の卒業生数は、127 で、 109 名の進路決定者がおります。この中には 36 名の大学院進学も含まれています。道内 73 、道外が 36 という実数です。歯学部につきましては、 4 月 30 日現在なんですが、研修医が 55 、大学院進学が 13 、歯科医が 10 という形になっていますが、これ以外に研修医がいます。

それから、看護福祉学部の看護学科につきましては、 80 名定員ですが、編入を入れて 100 名になります。で、去年の場合 91 名の進路が決まっていて、その中に進学者 8 名が含まれています。道内 42 、道外 49 です。で、福祉につきましては、 80 名いるうち 73 名が進路決定しています。この段階で大学院は決まっていませんでした。道内 52 道外 21 です。心理につきましては、 50 名定員で 45 名の決定がいて、道内 28 道外 17 です。

姉崎　高いですね。

上田　はい。やっぱり資格があるということで強いです。ただ、これが 4 月 30 日現在ですけれども、国家試験の発表が 3 月末までに出揃う状況なので、その前に決めて、もしくは決めておいて落ちたらだめっていう話の場合と、決まってから決めるという場合があるので、これが 5 月くらいまではずっと動いています。

姉崎　競合関係にある大学はいくつくらいあります

か。

上田　薬学は、北大と道薬科大、歯学は北大にあります。看護は天使大・札医大・日赤北海道看護大、それから旭川医大です。あと短大とか専門学校もあります。

当別町との関係

光本　そもそも当別町に大学ができたきっかけは何ですか。ちょっと古い話なんですけれど。

上田　1974 年、音別町にまず教養部をつくりまして、当別に薬学部の 3・4 年生の専門課程を持ってきました。

そのうちに、先生方の行き来、移動も大変ということになって、こちらに教養部も 1985 年に統合したという状況です。広いキャンパスをつくるためにということもあったのかな、と思います。

ただ、そのころですと――今ですと学園都市線 1 時間に 1 本必ずありますけれども――それまで本数がないと思います。医療大学の前にいま駅がありますが、その駅も昔はなかったので、当別町からスクールバスを出していたと聞いています。

布上　車で通う学生が多いと聞いていますが。

上田　上の学年になると、そういう傾向もありますね。

光本　学生は大学の周囲じゃなくて札幌市内から通っているんですか。

上田　6：4 の割合で当別町に住んでいます。

光本　割と多いですね。

上田　特に薬学部と歯学部と 1 、2 年次の看護福祉学部系統は当別町内に住んでいることが多いです。道内から来る人は札幌市内に住んでいますけれど、道外から来る人はまず当別町に住みます。で、看護系の実習が始まってくると、札幌市内に移ります。特に新琴似の周辺。地下鉄と学園都市線と両方のアクセスが良いところに移り住むことが多いというふうに聞いています。実験系があるので、薬とか歯になりますとやはり何時になるか分からないということなので、札幌まで戻ることがなかなか難しいのが実情です。

リフレッシュスクール

平島　リフレッシュスクールを受けた人の、受けての評価っていうのは…。

上田　はい。薬剤師リフレッシュスクールについては、まあだいたいアンケートはいいことしか書いてくれないんですけれども、基本的にはよかったです。

まず去年立ち上げたのが薬剤師のリフレッシュスクールでした。まず、今までと違って講師に医療大学の教員だけでない企画をしました。ですから、札幌市内にいる薬剤師の方々にもコマを持ってもらおうと。それから、病院の内科の先生であるとか、外科の先生であるとか、関連する分野の薬剤師でない方の話も入れたんですね。そうすることによって、自分たちがいつも聞いているのとは違うこと、あと、聞きたいと思っていたけれども聞けなかったことが聞けるようになったっていうことが一番大きかったと、アンケート結果としては出てきています。今年も 2 回やっています。それも同じような形で、異業種の方っていうか、同じ系列の異業種の方と、あと現場の方たちというふうに選んでいって、現場の方たちも病院薬剤師という分類の方と、開業薬剤師の方たち――いわゆる薬局の方ですね――関心事がちょっとずつ違うのでその二つを組み合わせて提供しているという状況なので、基本的には皆さんが大変喜んでいる状況です。

また、今回、ワークショップではないんですが、インターネットを使って実際にその場で、今 EBM ―― *Evidence Based Medicine* っていう言い方で、根拠のある薬物投与であったり医療をしましょうということは医療界で随分言われているんですけれども、それを検索する技術としてインターネットっていうのはとても大きな武器なんですけれども、それをやろうと言ったときに、来た人数はちょっと減りました

平島　ワークショップっていうのは具体的には。

上田　それも EBM の講演があって、そのあと事例研究、ケーススタディをやったんです。

平島　ケースワークを。

上田　ええ。ですから先生方が持ってきた事例を各グループに渡して、ある程度の資料は用意しておい

て、それを話し合いながら、調べながら結論を出していくということで、いらっしゃった方は最初からこれが企画でやりたかったっていう方の方が多かったようです。

地域と大学

相川　北海道医療大は、さっき地域性の話も出ていたんですけども、「地域」というとき、当別町よりは北海道という単位で見ているんですか？

上田　そうですね、どちらかというと、北海道という単位が大きいかと思います。

ただ、当別町もどうしても、やはり視点として忘れられないので、先ほど言った歯学部の在宅介護の歯科診療であったりっていうのは当別町と連携してますし、あと看護の先生方の動きの中では、「カスミソウの会」という当別町にある痴呆老人を抱える家族の方たちの会があって、それに積極的に関わって、研究現場で分ったことをそこに伝えていって、そことのやり取りをしている先生もいらっしゃいます。それから福祉の分野では、社会福祉協議会と企画をして、先日も当別町内でハープの演奏会をしているんですが、そのハープの演奏者というのが、福祉関係の場でとても有名な公演をいろいろなところでチャリティーであったりとか、施設に出て行ってやったりってされてる方だったので、そういうところのコーディネーションをしてみたり、というような形で当別町と関わっています。

あと、大学としてではないんですけれども、学生の動きの中で、やはり「 YOSAKOI 」を一生懸命やっている学生たちが、当別町内にある「 YOSAKOI 」のグループとかかわりを持つ。そこから派生して、今度も「センス・オブ・ワンダー」の映画の上映会とかあるんですけれども、そこに学生が関わっていく。4 、5 年前には、レーナ・マリアさんっていう、スウェーデンにいらっしゃる方で障害を持ってらっしゃる方をお招きするときに、学生が関わってくるっていうような形の当別町との関わりっていうのはあります。

光本　結果的に、当別町にとってはなくてはならない存在になっている。

上田　だと思います。特に、「アパート・マンション組合」っていうのがあるんですけれども、そこに入っているのはうちの学生がほとんどです。

姉崎　経済効果は相当なものですよね。

上田　ただですね、飲み会とかいうと、たいてい出ちゃうんですよね、札幌に。で、買い物っていってもやっぱり多分土日に札幌に出てしまっているので、そういう意味の経済効果はどうかは分かりません。

布上　教職員はどこに住んでいますか。

上田　職員ではほとんど札幌から通っています。私、数少ない方なんです。

姉崎　大学院もありますよね。一定時間経てきてるから、自校出身者の方がスタッフに出て、なってきていると思いますけれど。

上田　自校出身者スタッフは教員にはいますけど、職員は1名です。

姉崎　教員はどれぐらい？

上田　助教授クラスに何人かと、助手クラスは多いです。講師にもいます。他大学での勤務を経て戻ってくるというケースが多いようです。

ボランティア活動の支援

光本　ちょっと話変わりますけど、「飛んでけ！車いす」の会もこの大学でしたね。

上田　はい。そうです。うちの大学が始めたのではなくて、それこそ北大の医学部の方が始めたものなんですが、理事に私のところの長谷川聡という助教授が入っておりまして、彼が――先ほど言った福祉の臨床ゼミっていうのはそれなんですけれども――事務局の部分を大学の部屋で随分手伝っていた経緯があって、学生が現場で福祉を国際的にやっていくにはどういうふうなことができるかっていうのを臨床的に学んでいるような、クラスではないんですけれども、そういう場になっています。

姉崎　それ知らないんだけど。「飛んでけ！車いす」って？

上田　ベトナムが中心なんですけども、アジア諸国に一応シェアを持っています。車椅子が日本の場合はですね、まず子どもの車椅子であれば、成長段階によって形を変えていく。それから、いい車椅子に乗っていきたくなる。それから、電動に変える

ので古いものがいらないとかっていう状況があったり、もしくは車椅子を使われていた方が亡くなられたりということもあります。で、そういうふうに使われなくなった車椅子を回収、それから修理をして求めているところに提供しようというのが、一番大きなコンセプトです。

ただ、そのときにですね、持っていく方法、郵送費が一番かかるんです、国際的に。で、どうするかというと、ベトナムに行く人を探して、その人に持ち込みっていうか無料の範囲で持ってける荷物のなかに組み込んでもらうという発想で、お願いをするボランティアを探しているグループです。で、それを始めたのが多分、平成 10 年前後ぐらいかと思うんですけれど、 NPO 団体になって、いま全部で 300 くらい送った…。

光本　ベトナムだけじゃなくて、アジア地域に。

上田　はい。基本的にはアジア地域全部です。

光本　ええ。で、アフガニスタンにもかなり送っていらっしゃるようで、それで今回の空爆のときに…。

上田　あ、「飛ぶな！車いす」。

光本　はい。あれで僕知ったんですけど、興味を持ちまして、ちょっとホームページを見たら医療大のホームページがつながってるので、「あれ!?」と思って…。

上田　長谷川先生がインターネットに大変お強い方で、多分ホームページ関係、全部彼がやってる。そういう形で先生方が動いている。

それこそ「飛んでけ！車いす」の話ばっかりになってしまいますけど、「飛んでけ！車いす」の事務局はちょうど1丁先のところに事務所を構えているんですが、本当に小さな事務室だけの部屋なんですね。で、打ち合わせをしたい、そこにメンバー登録をしているのが 100 人近くいるらしいので、打ち合わせをするときの場所がないということで、ここを過去 2 回ほど使われていらっしゃいます。

光本　ああ、ここも。

上田　そのときに使うにあたって、まず一番最初に言われたのが「車椅子入るよね？」っていう確認で、車椅子を全部の部屋に入れてみて「使える」ということと、トイレの確認もして「使える」という確認をしています。

サテライトの利用資格、施設

上田　もう一つ言い忘れがあったかもしれません。今、ここを使用できる代表者が教職員、同窓会、後援会っていうふうに話したんですが、学生が入っていないんです。何かあったときに学生に責任を負わせることができないという言い方もできますけれど。現状では、ともかく教職員に関わってもらおうという考え方です。

今後は、例えば同窓会の関係というか卒業生たちが何かをしたいときに、同窓会の会員になっている者がいればいいんですけれども、それがいない場合、もしくは大学院生が何かをしたいとき、同窓会員になっている場合はいいのですが、そうでない者というところで、これからちょっと使い方をもうちょっと考えていかなくちゃいけないかなというふうに思っています。

光本　当別の方との、何かこう、 IT を使ったものですとか、そういった計画なんかは。

上田　当初はテレビ会議システムを入れるという話は入っていました。

光本　今のところ…。

上田　一つには経費の問題があります。それから、もう一つには、テレビ会議システムを入れるほどの内容のことを今ここでやるんだろうかっていうものがあったので、見直し時期にもう一度見直しをかけていくと思うんですけど。ただ、とりあえずですね、学内の LAN の整備が整った状況なので、リモートアクセスシステム、今なっていますけれども、ここの LAN もすべてうちのサーバーにつながっています。この間やったところで、 5 台までは接続できた状況です。

姉崎　サテライトをやってみて、まだ結論なんて早くは出ないと思いますけど、やっぱりつくってよかった、というのがだいたいの反応でしょうか。

上田　そうですね。少なくともまだ「あんなものつくって…」というご意見はいただいておりません。どちらかというと、どうやって活用しようかと考えてくださっている方が多いような気がしています。

やはり、当初これを立てるにあたって、財政の見直しは始まっていましたので、「それをしてなぜこんなものをつくる？」という意見はあったんです。

で、それよりももっと前に、たとえば「学生のためのものが必要ではないか」「当別町の中で必要ではないか」という話もあったんですが、今これができてみて、実際に使ってみて、使い勝手がいいという判断が大変高いので、そういう批判的なことは全然耳に届いていない状況です。

大学間連携の条件

谷　　他の大学とかとの連携は結構難しい問題も、というお話だったと思うんですが、他の大学とは何か…難しいっていうのは、やりたくないとかやりたいとか、あるんですか。

上田　大学との連携でできる可能性があるものというのは、多分単位互換なんだと思うんですが、単位互換については視野としては入っています。教員サイドに。ただ、それの実務まで残念ながらなってないので…。

これはちょっとサテライトの話とずれてしまいますけれども、単位互換の一番の問題点が、お互いにプライドを持って、お互いが同格であると認めるかどうかの部分で、単位互換という形での教育はできていない。もし単位互換ができれば、ここで講義をして、それこそ北大の方が来るとか、たとえばできると思うんですね。ですが、それが今現状ではできていない。

それから、北海道薬科大学さんとじゃあ薬学部で何か協力できないかっていうふうになったとしても…。先生方個人レベルではあります。例えば、先ほどの財団法人の日本薬剤師研修センターも、それと連携しているのが日本薬剤師会、薬学会という学会なんですが、そこの薬学会の道支部長は今、北海道薬科大学の方なんですけども、その方とうちの教員とは連携は良くて、北海道薬剤師研修センターの方がここを使うことについて、一緒に見にいらっしゃって「あ、いいことですね」っていう。ちょっと離れた部分では協力をしているんですけれども、「じゃあ企画をいっしょにやってみましょうか」ということにはなかなかならない。

だから、京都とかで大学間コンソーシアムとかありますけど、兵庫もいろいろやってますけれども、あそこのような形をするためには、どこか強力なコーディネーターとつなぎになるところが必要です。そういう意味では、話飛んじゃいますけれど、「道民カレッジ」っていうのが今年できていますよね。北海道の教育委員会が企画をして、北海道内で各大学であったり、教育委員会であったりを巻き込んで、企画を提供して、包括して、道民に提供しているっていう形のものだと思うんですけれど、こういうものがうまく機能すればいいなと思います。

社会人、留学生への開放

孫　　社会人に対して大学開放政策とか、留学生選抜をするとか、そういうことは。

上田　社会人については、社会人特別選抜枠というのは設けています。それは、大学院に関して言いますと、薬学研究科と看護福祉研究科では社会人の枠があります。その枠でお受けになっている方もいるんですが、ただ残念ながら夜間だったり土曜日のものが少ないので、まだ、いらっしゃっている方、そんなに多くない状況です。

あと、看護福祉学研究科の看護学専攻については、大学を卒業していなくても入れる枠というのを設けています。看護婦さんで臨床経験があって、だから専門学校卒業でも入れるという道はつくっています。ただ、薬学研究科もそうなんですが、専門の研究をするために来ていただくという前提ですから、前提としてその基礎能力がある、その課程の学士を持ってらっしゃる、もしくは理科系の分野を卒業されているというのが大前提になっています。

あと留学生については、医療大学としては「留学生が増えたらありがたいな」って思ってはいるんですけれども、現状として、国家資格を持っていないと臨床の現場に出られません。で、国家資格をとるためには学部を出てなければならない。で、学部に入るためには、日本語の試験しか設けていない状況ですので、留学生が学部では全然いない状況です。大学院では提携校から6カ月の単位で、今現段階ではお二人いらっしゃいますけれども、これは薬学研究科と歯学研究科です。この2人については、大学の中での基礎的な研究をし

ています。

孫　　日本では医療をすることできないですものね。

上田　そうですね。だからインターネットを通じてだとか、郵送を通じて、年 20 件くらい大学の資料請求は来ますけれども、こちらがまず書くのは「資料請求を日本語の様式で書いて送り返してください。そしたら送ります」っていうことと、それから「うちの大学では、奨学金を特に設けていないので、外部奨学金にあたってから応募してください」という形ですので、1 回それを送るともう返事が返ってこない状況です。

孫　　授業料もネックですね。

事業の予測、行政の意見

白取　サテライトをする前は、当別の本校で行ったりとか、また札幌の別会場を借りたりとかされてたと思うんですけれども、それに対して浮いた時間ですとか、会場借りれば会場費かかりますから、そういうものに対しての経費が削減されたという調査をされたんですか。

上田　まだ調査まではいっていません。最初の設定をしたときに会場費が浮くだろうということを前提として挙げました。だいたい公開講座関係で 1 カ所あたり 18 万円、会場費をみていましたし、あと、“かでる”であったり、“ちえりあ”を借りたとしても、 1 回あたりやっぱり 2 万ぐらいかかっている状況でしたので、その部分は浮くという計算でおりました。

時間的な浮くっていう部分は、あまり考えてはいなかったんですけれども、どちらかというと機材を運ばなくていいというのが事務方にしてはとても楽な部分ですね。最初に私これお伝えするの忘れてたんですが、今ここにあるのが、それこそ PC プロジェクタ 2 台あります。設置型と稼動型と。それからスライドは合計 2 台あります。ビデオもありますし、OHC 、OHP 、あとパソコンも 3 台常設でありますので、それを今までは必要なときにそれごとに持っていかなくちゃいけない。持ってくっていうことは大学から持ってくわけですから。今年度の前半―サテライトがない段階では、アルバイトさんにお願いをしていたんですけれども、司会・受付を。その方たちが取りに来ることができないので、結局事務職も行って置いてくる、とりに来る、でも司会はやらなくていいよっていう無駄な労力が発生していた。その部分の軽減っていうのはすごく大きくあります。

白取　この事業を始めるにあたって、当別から離れるわけですけれども、行政の方で当別町から何かご意見とかそういうものはありましたか。

上田　当別町からは特になかったですね。当別に相談をして行ったわけではないっていうのが大きな理由としてあります。で、サテライトキャンパスを開いたということは、教育委員会などに通知はしましたけれども、逆に今までも札幌市内等でやっていたものが大変多くあったということがあったので、特にそれ以上の感想はなかったように思います。

少子化と大学の将来

孫　　日本の社会の中では、いま子どもの数が少なくなってるし、学生の減少とか、どうですかね？　あともう一つは、今国立大学を統合して…、これからは私立大学も問題になると思うんですけど、そういった問題については話題になりますか。

上田　まず、少子化の部分については、自然減、本当に全体数が減ってるという部分の自然減はあります。自然に減っているという。ただ、たとえば大学さんによっては F ランクがつくとか。要するに定員まで人が集まらなくて「皆入れるよ」っていった大学が最近出てますよね。文系では特に。それは全然ないです。それについては、しばらくの間は心配はしていません。ただ、つねに何かを打っていかないと、何かを仕掛けていかないと、ただ待っているだけでは減ってくだろうという心配はしています。

あともう一つ、今の不況の影響が大変大きいんだと思うんですが、資格を持つ、国家資格を持つということを大変強く学生さんたちが思っています。ですから薬剤師、歯科医師、看護婦、看護士、それから社会福祉士、それから臨床心理士ですね、この分野に関しては、あと言語聴覚士も出てきますけども、皆さんとても強く関心を持っている。臨床心理士については、国家資格ではないんですけれども、社会的な不安の部分もあるんだ

と思います。心に対しての関心がとても高いので、今札幌市内でも心理をやる大学が増えていますが、それと呼応して全体的に減るというよりは、どちらかというと受験生が全部足すと増えている状況だと思います。あと…。

姉崎　今後。

上田　あ、今後ですね。

姉崎　それと統廃合。

一同　（笑）

姉崎　ありえないですね？さっきのあいの里の方どうするかっていうのはありますね。

上田　あいの里の高度化というのがありますね。

過疎地域との連携

上田(敦)　特別選抜で、過疎地域の薬剤師会とかで、北海道全体でのサテライトキャンパスとかっていう構想はあるんですか？過疎地域との連携ということで。

上田(理)　ここに話題として出てこなかったもので、卒業生向けのセミナーがありまして、それは支部が主催でやっているものです。薬学部と歯学部が企画してるんですが、薬学部の場合 10 カ所、それから歯学部の場合が今年 6 カ所やっています。例えば薬学部の場合、今年行ったのが、札幌でも行ってますけれども、帯広、宇都宮、青森、富山、水戸、釧路、沖縄、函館、滝川という形でやっております。ここの会場には、本学の卒業生、それからそこの地域の薬剤師会を通じて一般の方にも公開をして、そういうのをしているんですね。

やることに対しては大変皆さん好意的なんですけれども、ただ残念ながら人が 50 人集まるところが大変少ない。そういう状況の中で、サテライトキャンパスを恒常的につくるのは多分難しいと思います。ですから出前出張のような形でやっていくことになると思います。

歯学部はどちらかというと全国から来ているということが多いので、道内では小樽、それから秋田、沖縄、東京、熊本、新潟という形でやっているんですが、こちらもやはり 50 名集まるものが少ないので…。ただ、たとえば秋田でやりますと青森、それから宮城の方からも人が来るというふうに聞いています。なので、こういう形での出前の生涯学習の提供という形でしばらくは続けていくと思います。

あと、よく地方自治体から聞かれるんですが、「どことでも共催してくれるんですか？地域連携セミナーできますか？」ってお話をいただくんですけども、お話があれば前向きに検討していきたいと思うんですが、今年のように砂川からお話があった…というようなことがなければ、こちらからは広報活動して開拓をしてくところまではいっておりません。お話があった場合は、そのときにはいろいろな交渉事として、「じゃあ講師の講師料はどうする」とか「交通費どうする」という話も当然含まれてきますけれども、そういうことをした上でやっていきたいと思っております。

姉崎　コラボレーションの問題で、ブランチ方式というか、ネットワークを北海道の中で、医療はプロフェッションが実際のものをやるから、そういうクリニック的なものは大学がもう少し自治体と連携して何かやるとか、そういう発想は委員会レベルなどではまだ…。

上田　委員会レベルではまだないですね。

ただ、コラボレーションになるかどうか分かりませんけれども、奥尻で地震があったときですとか、この間の、洞爺での地震ですね。ああいうときには、派遣をしております。奥尻のときは、津波で入れ歯をなくし――就寝時間だったので入れ歯をはずして寝てた高齢者が多くて――で、入れ歯をつくってほしいという要請があって、急きょ遽資材をもって、先生方が入って入れ歯をつくった、ということもありますし、あと、洞爺のあそこの場合は…。

姉崎　有珠山。

上田　有珠山の場合は、各避難所のところにまわって歯科診療を。つまり継続的に行っていたのができなくなってしまった方もいらっしゃいますし、まあ逃げてくるときに入れ歯をなくすということはなかったとは思いますけれども、あそこで寝ていることによって、かえって不調によって歯の具合が悪くなった方というのがいましたので、そういう方たちの無料診療をやっていたりしています。また、歯科ではないんですけれども、心理の部分での、臨床心理士の資格をもっている方と、あと学生たちがボラン

ティアでっていう形でも行っておりますので、そういう形ではやっているんですけれども。だから、恒常的ではない。

光本　話が飛んで申し訳ありませんけど、音別にかつてあったけれども、今はもうまったくないんですか。

上田　はい。完全に撤収いたしました。

光本　そうですか。もう何も残ってないんですか？

上田　建物は残っていて、音別町の方で何か有効利用されているということは聞いたことがあります。実はですね、寮もあったんです。駅までそれこそ車で 2 、30 分かかるような場所にあったらしく、寮をつくって全寮制にして教養学部の期間だけ入れる、ということで、大学の校舎と寮と、すべて完備していた状況なので、その施設は今有効利用されているというふうに聞いています。

光本　じゃあもう福利厚生施設的なこととかそういうことも。

上田　学生の福利厚生は、茨戸にある教育研修センター以外持ってないです。

光本　どうもお忙しいところをありがとうございました。やっぱり来てみると全然印象が違いますね。

上田　そうですか。多分ここは来てみていただく方が良い場所だと思います。

以上